

氏 名：酒井 昌子  
学位の種類：博士（看護学）  
学位記番号：甲第 158 号  
学位授与年月日：2017 年 3 月 10 日  
学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当  
論文審査委員：主査 吉田 千文（聖路加国際大学教授）  
副査 菱沼 典子（聖路加国際大学教授）  
副査 中山 和弘（聖路加国際大学教授）  
副査 井上 智子（国立看護大学校大学校長）

論文題目：家族介護者が要介護者とともにある関係をつくり生活を再構築するプロセス

#### 博士論文審査結果

この研究は、高齢者を自宅で介護し続けている家族介護者の健康に注目している。家族介護者は介護のために一旦は自らの健康を失いそうになるが、それをどのように改善していくのかというプロセスを、家族介護者と要介護者の相互作用に焦点をおき、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的記述的に探求した。

25名の家族介護者にインタビューし、かれらが介護において要介護者とともにある関係をつくり、生活を構築するプロセスとは、家族介護者が、介護において「要介護者とともにある関係」に気づき、それに基づいて介護生活をつくり直すという、「要介護者との関係性」についての介護者の認識の変化とそれに基づく介護生活を再構築するダイナミックなプロセスであったと結論付け、そのプロセスは、第 1 段階「家族介護者が一人奮闘し介護行為しか見えない段階」、第 2 段階「家族介護者が要介護者との相互関係に気づく段階」、第 3 段階「家族介護者と要介護者がともにある関係をつくり生活を立て直す段階」、第 4 段階「家族介護者が要介護者との穏やかな生活を継続する段階」であると記述された。

審査の過程では、理論前提であるシンボリック相互作用論がうまく活用されていない、結果の書き方が乱雑である、構造図がわかりにくい、考察が全般的に表面的であり研究の意義・主張点等がわかりにくい、深みのある考察が必要といった論文全体にわたる事項が指摘された。最終的にはこれらの指摘を反映した記述がなされていることを 2 月 27 日の審査にて確認した。

この研究は、要介護の家族をともに暮らし続けることの意味についての記述であり、「ほぼ在宅、時々入院」を実現するための支援の在り方に多くのヒントを与えるものであると考えられた。結果及び考察の深さについては未だ課題が残るものの、これからの看護の在り方に寄与する結果が得られたと審査委員全員で判断した。また、この研究テーマに長年かかわり続け、最終的には新たな知見に辿り着いた熱意と努力を評価し、今後の研究者としての活躍に期待したい。

以上により、本論文は、本学学位規程第 5 条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。